

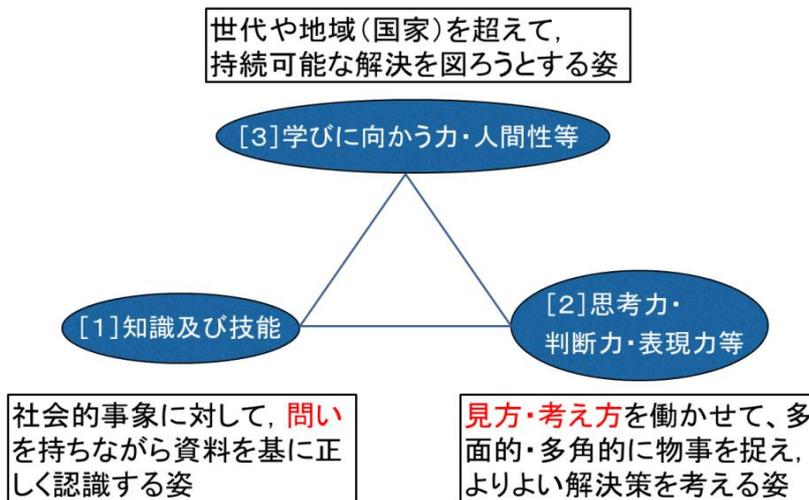
教師が学ばせたい「問い」を生徒が学びたい「問い」にする社会科学習の工夫

小田 修平

坂田 秀一

1 社会科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

本校社会科では、「夢中になって問い続ける生徒」の姿を、育成すべき3つの柱である [1] 知識及び技能 [2] 思考力・判断力・表現力等 [3] 学びに向かう力・人間性等に対応した姿として、資料1のように整理をしました。そして社会科の本質を「社会的な見方・考え方を働かせて、問いを立て、追究・解決することを通して、民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成すること」と定義して、その本質に迫る授業の工夫を行うこととしました。



資料1 夢中になって問い続ける生徒の姿

2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

「夢中になって問い続ける生徒」の育成で私たちが大切にしたいのは「問い」です。生徒が内面にある見方・考え方を働かせて自らの考えを表現したくなる授業設計によって「本当にそうなのか」「どうしてそのようにいえるのだろうか」「さらに調べてみたい」というような新たな問いが生み出されます。つまり授業を通して、教師の学ばせたい「問い」が生徒の学びたい「問い」に変化し「夢中になって問い続ける生徒」を育成できるのです。

そこで本校社会科では今年度、主に次の2つの項目に絞って授業改善に取り組んでいます。

(1) 教師が学ばせたい「問い」を明確にする授業モデル

まず、生徒に学びたい「問い」を持たせ学び深めさせるために、教師が学ばせたい「問い」を明確にします。そこで授業のタイプを資料2のモデル1～4に類型化しました。

モデル1は、基本的な知識を活用しながら獲得していくことを目指した授業タイプです。この授業における基本的な知識とは、個別的知識（事実）を捉え、それらを結びつけて社会的事象の原因や理由を説明するために必要な概念的知識であると考えています。

モデル2は、概念的知識を用いて、なぜそのような問題が生じたのか、その問題はどのような結果や影響をもたらすかを推論した上で、自分自身の価値観に基づいて問題の解決方法や対処法に関する意志決定ができるようになる

- モデル1 基本的な知識を活用しながら考える
- モデル2 課題についての意志決定力を育てる
- モデル3 現実社会により近い活動を取り入れる
- モデル4 社会との連携に基づいて取り組む

資料2 「問い」を明確にするための授業モデル

ことを目指すものです。この授業において、意志決定すること自体が目標ではなく、異なる他者の意見を踏まえて自らの決定や自らの判断の基準を振り返り吟味し、よりよい決定ができるようになることが目標となります。

モデル3は、現実社会に近い活動を積極的に取り入れ、思考・判断や意志決定を求めていくものです。このような活動を行うのは、生徒に問題を追究するための社会的文脈に気づかせ、問題に取り組む動機を与え、主体的に問題解決に取り組むことができるようにするためです。

モデル4は、**モデル3**の授業を地域の行政機関やNPO、大学等との連携に基づいて行おうとするものです。これらの連携を通して、生徒は地域の人々や団体と直接触れ合い、自分とのつながりを実感することができます。そのようなつながりは、生徒に自らが社会と関わり、参画していくことの大切さを実感するために必要であると考えます。

(2) 教師が学ばせたい「問い」を生徒の学びたい「問い」にする手立て

次に、単元の構造化を行います。**資料3**は、**モデル3**における公民的分野「現代社会を捉える見方・考え方」の単元構造化の例です。

① 育成すべき生徒像

資料3の「育成すべき生徒像」は、**資料1**の[1]～[3]に対応した資質・能力を、単元レベルで記述したものです。この段階での教師が学ばせたい「問い」は、必然的に育成すべき生徒像に関連したものです。

② 単元構想，働かせたい見方・考え方

資料3の「単元構想」には教材にどのように出会わせるのかという課題設定や課題提示、どの立場で考えさせるかという状況設定等を記述しています。また、「働かせたい見方・考え方」には、課題解決に向けて生徒に働かせて欲しい見方・考え方を記述しています。

資料4は、単元導入時に提示したものです。より切実感を持って課題に取り組ませるために、時期は6月、部活動最後の大会前の体育館使用、立場は体育館部活動生徒、決定事項を最後の3日間の体育館使用

単元名：現代社会を捉える「見方・考え方」(公民的分野)
～対立を解消するにはどうしたらいいのだろうか～

育成すべき
生徒像

- [1] 物事の決定や社会におけるきまりの役割などについて理解し、
- [2] 対立と合意、効率と公正という見方・考え方を働かせながら、様々な課題のよりよい解決策について考え、
- [3] 他者を尊重しながら課題を解決しようとする生徒

単元構想

中体連大会前の部活動体育館割り振りや生徒会役員選挙の方法等、合意方法の問題点が浮かび上がるような設定を教材化することで、リアルなジレンマに直面させ、次々に生まれてくる問いを協働して解決していくような単元にします。

働かせたい
見方・考え方

【単元を貫く課題】
よりよい決め方とはどのようなものだろうか
【働かせたい見方・考え方】 対立と合意、効率と公正

資料3 モデル3の単元の構造化の例

〇〇附属中学校は、数多くの体育系部活動や文化系部活動が熱心に活動している学校なんだ。バスケットボール部は市内屈指の強豪で、体育館はバスケットボール部を中心に使用している。

だけど、7月の市中学生大会を1週間後に控え、最後の3日間の練習を、バレーボール部も体育館を使用したいと要求することになった。

☆3年生にとって後悔しない最後の大会にするために「効率」と「公正」に配慮した解決策を提案しましょう。

曜日	使用割合(面積)		部員数	男子バスケット	23人
月曜	バレーボール			女子バスケット	28人
火曜	バスケットボール				
水曜	バレーボール	バスケットボール	男子バレーボール	24人	
木曜	バスケットボール				
金曜	バスケットボール				

資料4 課題設定や課題設定の方法

に反映させるというリアルな状況設定で課題に取り組みました。

また、課題解決の目的を「3年生にとって後悔しない最後の大会にするため」と明確にしました。さらに、課題解決に必要な「見方・考え方」である「効率と公正」を例示しました。このことは、生徒がゴールを意識し、身に付けた「見方・考え方」を働かせていることを自覚しながら、自らの「問い」を解決していく手立てになりました。

③ 生徒の学びたいという新たな「問い」を自覚させる手立て

資料5は振り返りシートの一部です。課題解決に向けた歩みを図化することで、学びの足跡を自覚させるようにしています。また、問い直しの場面では、教師が「働かせたい見方・考え方」について、生徒が自分なりの言葉で定義し直しています。これは、教師が学ばせたい「問い」が生徒の学びたい「問い」に変化したのかを教師が見取る材料にもなります。また、生徒にとっては、自分や周りの生徒の変容を知る機会にすることで、新たな「問い」に気づききっかけになるのではないかと考えています。

公開します授業を通して、社会科学の授業において、生徒自身が問いを創出し、問いをつなぎ、学習を推進するための教師の役割について議論できますことを楽しみにしております。

対立点 面積 時間	曜日		使用面積・時間	
	水曜	前半 バスケ 60分	後半 バレー 60分	木曜
木曜	前半 バレー 60分	後半 バスケ 60分	金曜	前半 バスケ 60分
金曜	前半 バスケ 60分	後半 バレー 60分		

大きいコートで
本番を想定した練習をする。

効率的視点

- 強豪とか関係ないと思う。それで決めるのはやめてほしい。 → 男バスの意見 (論外)
- どの部活も毎日使いたいはず。 → 女バスの意見 (少し男バレーへの配慮が足りない) (公正さ)
- 使用しない時間・面積は無駄が良い。 → 女バレーの意見 (非効率的)
- 木曜にバレー部が使用できない。 → (公正さ)

公正の視点

学びの足跡を自覚させる振り返り

バレー ⇨ 男子用ネットで大コートをつくる。… 今、実際附の練習では男子のネットで女バレーも練習している。少し高くてやりづらいが、上手になる。
(嫌なったら ← ネットもネット) → 本番女子のネットでやると、簡単に感じられるからいいのでは？

バスケット ⇨ 大コート … 土日の練習のように大コートで男子も女子も一緒にやる。

- (時間と面積も平等に分けり)
- (どの部活も毎日練習できる)
- (全ての種類の練習ができる)
- (余らぬ (時間・面積))

見方・考え方を再定義する問い直し

「効率」と「公正」について、自分なりの言葉で定義し直してみましょう。 シーナ・アタックは平等に使う

効率とは・・・時間、お金、ものを無駄なく使うこと。

公正とは・・・どんな人にも平等に、決して不当な理由で機会が制限されていないこと。

資料5 振り返りシートの例

<主な参考文献>

- 桑原敏典「高校生のための主権者教育実践ハンドブック」、明治図書、2017
- 真島聖子「見方・考え方を育てる中学公民授業モデル」、明治図書、2019